

## 〈論 文〉

## 藤堂藩の藩世界と上野天神祭

——藩祭・公儀祭・民祭——

吉 田 竜 司

**要旨：**伊賀上野城下町で発達した上野天神祭は、近世以降に発達し、江戸期後半に曳山祭として確立した近世城下町祭礼の典型のひとつである。本稿では、「藩世界」という研究視角から、同祭礼が支配者である藩にとってどのような社会的存在であったのかについて考察する。

藩政期に上野城下町を支配した藤堂藩は、津・伊賀・城和という3つの地政学的特質の異なる藩領を広域に支配していた。この3つの藩領には、それぞれ小盆地宇宙を代表する祭りとして津八幡宮祭礼・上野天神祭・春日若宮祭礼が発達したが、これらが藤堂藩の藩世界においてどのような性格を有していたのかを比較検討すると、津八幡宮祭礼は藩の威光を誇示し再確認するための「藩祭」、春日若宮祭礼は幕府の大和国統治のために出仕を義務付けられた「公儀祭」、上野天神祭は城下町民たちの経済力と創意に任せられた「民祭」としての性格を有していたことがわかる。このような藩世界内での位置づけの違いが、上野天神祭が曳山祭へと発達することを可能にしたのである。

## は じ め に

上野天神祭は、近世以降に発達し、江戸期後半に曳山祭としての姿を確立した近世城下町祭礼の典型のひとつである。その特色は、その祭礼行列において鬼行列・楼車（だんじり）・町印<sup>①</sup>が現在でも受け継がれていることにある。これは、近世城下町祭礼の発達過程をよく保存している点で評価される。

近世城下町祭礼の典型的な発達過程は、初期の練物行列から曳山祭への道筋を辿り<sup>②</sup>、そうした発達を可能にしたのは、町場の特権商人たちの莫大な財力と、町人世界の自治的結束であったことがつねに指摘される。ただし、それらはたしかに豪華な曳山とその運行を可能にする内発的条件として必須であるのはたしかであるが、それだけでは近世社会の基本的な社会条件を視野に入れないことになる。祭りをおこなう民衆にとって近世社会とは、なによりもまず武家支配の身分制社会であり、その制約／促進条件の下であらゆる社会的営みが成立していたからである。そのことは、祭りの成立とその後の発達にも大きく関わっ

ていた。

まず、そもそも近世城下町祭礼の成立じたい、城下町建設時の民衆集住政策として与えられた地子免除や商業特権などの各種優遇策を条件としていた。これらによって城下町人たちが蓄積した経済力が祭り成立の基盤となったのである。また、その後祭礼行列の出し物が趣向を凝らし大掛かりで豪華なものへと発達するか、あるいは規模を縮小したり興行的な催事に主役の座を譲ったりするかなど、どのような道筋を辿るかは、藩主から町人への下賜などによる祭礼の奨励や、逆に儉約令などによる祭礼の規制等が大きな影響を与えてきた。その意味で藩は、町人文化としての城下町祭礼の辿る道筋の転軸手だったのである。もちろん城下町を統治する藩にとっての城下町祭礼と、祭礼を担う城下町人にとっての城下町祭礼は、おのずとその視野も意味付けも異なってくる。そうであるからこそ、その両者の接合や衝突のなかからある祭礼の発達の道筋が定まってきたのである。

例えば、祭りの創始において、城下町繁栄策としてなにかしかなを下賜する藩と、それを喜んだ町人が祭りを創始するエピソードがしばしば伝えら

れている。長浜曳山祭（滋賀県）の創始にあたって当時長浜藩主であった豊臣秀吉が男子出生の祝いとして町民に砂金を下賜し、それを基金として曳山が作られたという伝承はそのひとつである[市川・武田, 2017: 8]。また、高岡御車山祭（富山県）の成り立ちについて、高岡藩主の前田利長が本家の金沢藩主前田利家が豊臣秀吉から拝領していた七輻の車（鳳輦か）を城下の七町に下し、これをもとに曳山祭礼が始まったという伝承がある<sup>(3)</sup>。そして、後述のように上野天神祭も、祭りの始まりにおいて、城下町人たちが中絶していたかつての祭りの再興を嘆願し、それを藩が許可するかたちで始まった。このように、城下町繁栄策や領民統治の観点から祭りを積極的に推奨する藩主と、藩主の威光を顕彰するとともに自分たちの楽しみとして祭りに取り組みたい城下町民たちとの利害の接合が城下町祭礼の創設につながったことを窺わせる伝承は数多いのである。

いっぽう、江戸時代を通じて幕府からたびたび発せられた倭約令や、藩財政の逼迫によって藩独自におこなった倭約政策によって、城下町祭礼はしばしば圧迫を受けてきた。例えば、和歌山東照宮祭礼は、藩主徳川頼宣による規模縮小令によって「豪華な曳山・昇山が姿を消し」た[作美, 1996: 88]。ただしそうした状況に直面しても、祭り縮小と奢侈禁止を令する藩に対して、それを潜り抜けて祭りの賑わいを継続しようとする町人とのせめぎあいが祭りを変質させ、あるいは近代以降につながる祭りの基本形態を確立させた例もある。例えば、「江戸天下祭り」と呼ばれた山王祭と神田祭では、元禄期に発達した曳山が数十年も経ずして享保の改革の対象となり、屋台の全面禁止をはじめとする大規模な規制に晒された。「この措置によって屋台のような大型曳山はしばらくの間、江戸祭礼から姿を消した」のである[作美, 1996: 88-89]。しかしその後、享保の改革を打ち出した徳川慶喜が死去するや、再び豪華絢爛な曳山が復活するようになる。とはいえ、以前の舞台と楽屋を備えた大型の屋台では享保時代の町触に抵触するため、舞台専用の屋台と楽屋専用の屋台の2台に分散することで機能面において復活させるなど、町触をかわす工夫<sup>(4)</sup>をおこないな

がら、幕末にかけて徐々に大型化を進めていったのである。

このように、城下町祭礼の盛衰や形態に対して統治主体である藩の意向は大きく関わっていた。ではその意向はなにによって決定づけられていたのか。もちろん藩主の個人的嗜好によってもっぱら決定されていた場合<sup>(5)</sup>もあるだろうが、特定藩主一代を越えたスパンでみればその意向は藩統治の見地から当該祭礼がどのように位置づけられていたかによって基礎づけられていると考えるほうが妥当だろう。一藩を統治する立場からみた城下町祭礼は、領内各地の事情のみならず、公儀（幕府）やときには隣藩との関係、さらには自藩の政治経済状況など、さまざまな統治上の事情のなかでその扱いが定まるのであり、その扱いは、身分制を絶対条件とする近世においては、祭りの帰趨に大きな影響を及ぼしてきたはずである。そして、そのような視角から捉えてはじめて、ある城下町祭礼の発達の道筋とその性格をわれわれは適切に理解することができるだろう。

こうした、藩からみた祭りの意味を問うという本稿の問題関心は、藩政史研究における近年の動向とも軌を一にするものである。すなわち、近世幕藩体制下における各藩の個別事情に視点を置いて、そこから固有の秩序のあり方とその変容を捉えようとする立場によって、「藩世界」という研究視角が提唱されている。そこで本稿では、近世における上野天神祭の性格を理解するために、藤堂藩の藩世界における同祭礼の位置づけを捉えることを通して、同祭が曳山祭へと発達することができた政治経済的条件について考察する。

## 1. 藤堂藩の藩世界

－伊勢・伊賀・城和－

### 1) 一国二城の藤堂藩

上野天神祭がおこなわれる上野城下町を中心とする伊賀は、江戸時代には藤堂氏が治める津藩に属した。この津藩は、津市一帯の古名をとって「安濃津藩（あのみつはん）」とも呼ばれたようだが、江戸時代の正式名称は、藩庁の置かれた津の地名を採用した「津藩」だったようである。ただし、近世大名のなかでも、外様大名でありながら

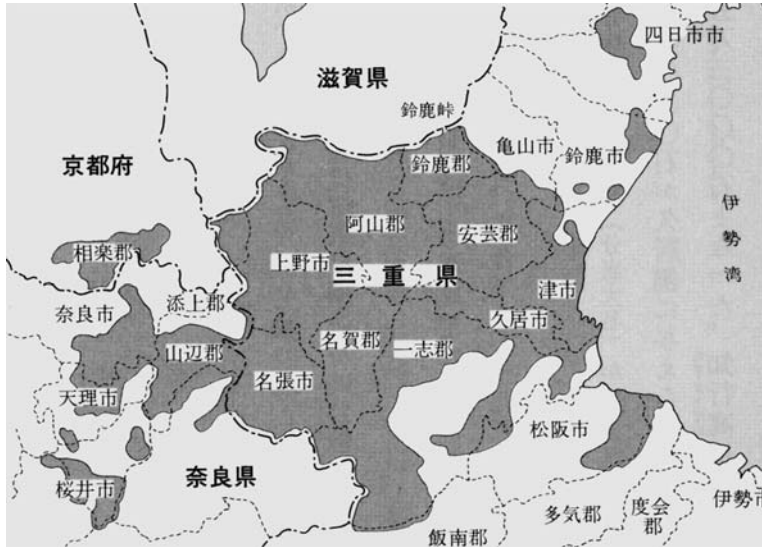


図1 藤堂藩領 [深谷, 2002: 4]

実質的に譜代に相当する格付けを与えられ、幕臣として重んじられた藤堂氏の藩領 32 万石は特殊で、藩庁のある津城下町を中心とする伊勢と、上野城下町を中心とする伊賀、それに山城・大和の一部を合わせた「城和領」の、大きく分けて3つの異なった藩領を広域に支配していた<sup>(6)</sup>。じつに伊勢湾岸から上野盆地を経て奈良盆地に至る東西を横断する地帯を、現在の三重県・奈良県・京都府の一府二県にまたがって領していたのである [図1]。

このような広域の藩領において、主要な3つの領地の地政学的特質は大きく異なっており、藩によるそれぞれの位置づけも当然ながら異なっていたことは容易に想像できる。したがって、ここでは、江戸時代の正式名称であった藩庁地名由来の「津藩」ではなく、藩主名を冠した「藤堂藩」と呼ぶことにする<sup>(7)</sup>。

藤堂藩は、江戸幕府開設直後の慶長13年(1608)、初代藩主となる藤堂高虎が、それまで筒井氏が治めていた伊賀と富田氏が治めていた伊勢を合わせたおよそ20万石の地に入封することによって誕生した。これは、まだ関ヶ原の合戦後の不穏状況下で、大阪以西に残存する旧豊臣勢力を抑えるべく、「西国の咽喉」と呼ばれた伊賀と伊勢湾に面した軍事的要衝であった伊勢を一体と

して治める必要から、徳川家康の信を得た高虎にこの地が任されたからであった。

入国した高虎は、慶長16年(1611)から伊賀上野城と伊勢津城の両城とそれぞれの城下町建設を同時に開始する。入国時の事情から明らかなように、この両城下町の建設は、大阪方面からの攻めに対する軍事的防衛拠点としての性格を色濃くもつものであった。すなわち、「大坂包囲網の一環としての連携した機能を果たせるように、二つの城郭の位置と形態が計画され、町割がなされ、両城の間の物資流通を円滑にするために伊賀街道を官道化した」のである [深谷, 2002: 55]。そして高虎は、津を藩主居城の藩庁城下町とし、上野城には城代を置いて伊賀以西を治めさせた。その後元和5年(1619)には、伊勢の領地5万石分が領地替えされることとなり、大和の四郡ならびに山城の一郡が替地として与えられた。これがいわゆる「城和領」であり、この支配は上野城代の職掌とされ、奉行所が設置されて派遣された城和奉行にこの地を治めさせた。

こうして、その後の加増もあわせて公称30万石の大藩となった藤堂藩は、のちに幕府によって発せられる一国一城令にも関わらず、津・上野の二城<sup>(8)</sup>をおくことが許され、領内にほぼ同規模の城下町を2つもつ特別な藩として明治維新まで続

いたのである。

## 2) 藤堂藩の藩世界と3つの小盆地宇宙

さて、近世の藩研究においては、近年「藩世界」あるいは「藩社会」という視点が注目を集めている。これは、従来の藩研究が幕府に従属する統治単位として各藩を捉え、幕藩体制原理が各藩の統治・経済制度にどのように反映され、それらが時代とともにどのように変容していったのかを解明することに主眼が置かれていたことに対して、一藩内部の政治文化的多様性／多層性や、ときに藩領という地理的境界を越えた／またぐ関係をも視野に入れることで、各藩独自の政治文化の解明を目指そうとする立場である。こうした視点に立った藤堂藩の藩政史共同研究を監修した藤田によれば、「一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、『藩社会』『藩世界』などの概念が次々に提唱され、藩が単なる政治組織に留まらず、被支配者層をも含む『国家』の実態をもっていたことに着目した共同研究が量産されてきた」という〔三重大学歴史都市研究センター（編）、2014: 3〕。すなわち、「藩世界」という概念の提唱とは、幕府の側に立脚し、各藩を「一枚岩の統治機関」として捉える視座<sup>9)</sup>から、個別藩の立場から多様な

内実に目を向けることで、藩の「国家としての世界」を描き出そうとする視座への転換を意味しているといえることができる。

このような「藩世界」という視点は、伊勢・伊賀・城和とそれぞれ互いにある程度隔絶した広範な領地を治める藤堂藩の場合にはとくに有効である。この三地域は、伊勢と伊賀が鈴鹿山脈から布引山地にかかる山地で分けられ、伊賀と城和が木津川沿いの幅広い丘陵地帯で分けられ、それぞれ互いに独自の文化圏となってきた<sup>10)</sup>。このような地理的レンジにおける文化的まとまりを、文化人類学者の米山にならって「小盆地宇宙」と呼ぶのが適当だろう。米山は地域文化を捉える際に、日本の地形的・歴史的特質を踏まえるならば、柳田国男が描いた遠野郷や、奈良・京都などの山で囲まれた盆地をモデルとするのが「適当なサイズ」であるとし、それを「小盆地宇宙」と表現した。

「小盆地宇宙」は典型的には、盆地の中心に領主の居城と、その城下町があり、そこにひと、もの、情報の交流がある。その町場の周囲には水田を主とする農地がひろがっている。そしてその外周には、丘陵がとりかこ



図2 藤堂藩の3つの小盆地宇宙と祭礼 [伊賀市, 2016: 96 より作成]

み、そこには桑畑や果樹園がひろがっている。…別の言葉でいうと、盆地は周囲の山々の分水嶺で取囲まれているわけである。[米山, 1989: 254]

以上をまとめると、藤堂藩の藩世界は、伊勢・伊賀・城和の3つの小盆地宇宙を抱えていたということになる<sup>(11)</sup>。そして、本報告書でとりあげる上野天神祭は、藤堂藩における3つの小盆地宇宙のうちの伊賀を代表する祭りなのである。

では、他の二地域にはどのような祭りがそれぞれの小盆地宇宙を代表するものとしてあったのかというと、伊勢には津八幡宮祭礼、城和には春日若宮祭礼（おん祭）があった[図2]。以下では、近世における上野天神祭の性格を理解するために、これら3つの小盆地宇宙のそれぞれを代表する祭りが藤堂藩の藩世界においていかなる位置づけをされていたのかを検討する。

## 2. 藤堂藩の藩世界と3つの祭礼

### 1) 津と八幡宮祭礼

藩庁のおかれた津城下町は、伊勢湾に面し廻船や漁船が多く出入りする湊町であるとともに、南北を伊勢街道が縦断し、伊勢参りの旅人で賑わう商都でもあった。城下町建設にあたって高虎は、町人の移住を促すために町人地の地子（年貢）を永代免許とする優遇策を布いている。

藤田によると、戦国末期に生まれ乱世を槍働き一本で生き抜いて大大名へと上り詰めた藤堂高虎が近世初期の並みいる大名たちに比べて特筆すべき点は、「藩創出の先駆者として評価」できる点にあるという[藤田, 2009: 5]。高虎は、徳川幕府形成期に、家康の参謀として幕藩体制下における藩の基本認識を打ち立てた。すなわち、藩は大名の私物ではなく、大名は將軍の家来であり、大名が治める藩は幕府という公の頂点に連なる一統治単位であり、それゆえに幕府への御奉公として將軍から領内の統治権を当面のあいだ預かる存在であるという認識である。のちに「預国論」として知られる「殿様は当分の御国主、田畠は公儀の田畠<sup>(12)</sup>」という言葉は、こうした政治理念が藤堂家に連綿と受け継がれていたことを示してい

る。そこには、中世的な領国鎖国主義の延長線上で武力によって天下を統治するだけでは不十分で、幕府を頂点とする公の權威のヒエラルキーのなかに統治主体（大名）を連邦制的に編成することによってはじめて盤石な治世が保証されるという、近世的な統治思想をみることができる。

このような、武力に加えて權威を重視する高虎の統治思想は、近世初期の武断政治段階において、すでにのちの文治政治を先取りするものだったといえるだろう。そのことを体現しているのが、幕府の朝廷工作において高虎が主導的役割を果たしたことである。藤堂藩の藩世界研究の先鞭をつけた深谷は、「高虎が他の大名の追隨を許さない力を示した分野」として、「朝廷と徳川氏の結合のために働き、結果的に、公武融和の近世公儀という国家形態を確立するうえで大きな役割をはたした」ことを指摘する[深谷, 2002: 69]。

江戸幕府開設当初から家康は、朝廷權威への食い込みを通して統治権の正当性を強化することを画策した。具体的には、武家官位の將軍推挙と無定員の約束を朝廷に取り付けることや、眷属の婚姻による天皇家との関係強化などであった。そして高虎は、後水尾天皇へ家康の孫にあたる秀忠七女との和子を入内させるにあたって、当時公家社会の頂点にあった近衛家との親交を通じて朝議取りまとめの周旋に奔走するなど、「公武融和の近世公儀」の確立を大いに補弼するはたらきをしたのである。それは、「天朝を御羽翼遊ばされてこそ諸大名も屈服し万民も仰望つかまつり候」という、高虎の確固たる統治理念に支えられていた[深谷, 2002: 70]。これは、朝廷の權威に連なる存在として幕府を位置づけること、すなわち幕府という公のさらに上位に朝廷という宗教的權威を戴くという統治理念なのであった。

このように、高虎は江戸幕府形成期においてすでに、統治における宗教的權威の重要性を十分に理解しており、それはその後の藤堂藩の領内政治にも受け継がれていくのである。

寛永7年（1630）に死去した初代藩主高虎は、はじめ江戸の寒松院に葬られたが、のちに二代藩主高次によって創建された津城下の昌泉院（のちに寒松院）にも廟が建てられ、以後津の寒松院は

藤堂家の菩提寺となる<sup>(13)</sup>。また高次は、城南にあった八幡宮を城下の現在地に移した際、高虎を合祀し、社領200石を与え別当・神職をおこなう場と定めた。この時点で藤堂藩祖高虎は、ちょうど徳川家康が「神君」として日光東照宮に祀られたのと同じように、藤堂藩の威光の源として神格化されることになったのである。

そして、寛永13年(1636)からは「藩主出資金を町方に貸付けた利子を経費にあてて毎年祭礼が行われるようになった」[深谷, 2002: 117]。これが、津城下町の惣町祭礼として江戸時代を通じて戦前まで続く「津八幡宮祭礼」であった<sup>(14)</sup>。

祭礼は八月十五日を本日として七日間に及び、八幡宮から八幡町内の御旅所に渡御した神輿を、津藩の民政を統括する加判奉行が藩主の名代として迎える。随伴した各町の練物が神輿を先導し、伊勢街道を行列して、京口門から津城内に入り、藩主や重臣の上覧に供したのち八幡宮に還御する。各町がそれぞれ趣向を凝らした練物行列のしんがりは津町総年寄の伊勢又五郎が務める。[菅原, 2009: 196-197]

この祭りに関する史料は、他の藩政関連・町方関連文書ともに太平洋戦争末期の津空襲でそのほ

とんどが焼失したため、その様子を窺い知る手掛かりは限られている。そのなかでも「津八幡宮祭礼絵巻」は、祭礼行列と背景の都市景観を精緻に描写した絵図として貴重である。同絵図を分析した菅原は、これが描かれた景観年代を江戸時代前期の寛文から延宝年間(1670~1680年代)と推定し、この絵図に描かれた当時の津城下町の都市像と建築について検討している[菅原, 2009]。

そのなかで、他の祭礼絵図にはみられないこの絵図の特徴として菅原は、「祭礼行列が描かれているにも関わらず、町屋の内外でこれを見物する町人等は全く描かれていない」ことを指摘する[菅原, 2009: 107-200]。たしかに同絵図を見ると、祭礼行列は先頭が津城京口門に達し、最後尾が八幡宮を出たところまでが描かれているが、その間の町場において、建物はじつに精密に描かれているのだがそこに見物の人影はまったくなく[図3]、行列の最後尾が過ぎたあとの八幡町でようやく路上に出て行列を見返す見物人や飛脚、また茶店の店子と客などが描かれている[図4]。こうした描写は、管見の限り他の祭礼絵図ではまったく見られないものである。その理由について菅原は、「絵巻の作成目的や作成者に関わる問題」として推察を控えている[菅原, 2009: 200]。とはいえ、そのきわめて精緻な筆致から、おそらくこれが当時の津八幡宮祭礼のリアルな姿に近いものだったのではないと思われる。



図3 見物人のいない祭礼行列 [まつり・祭・津まつり展実行委員会(編), 2001: 34-35]



図4 祭礼行列最後尾の後 [まつり・祭・津まつり展実行委員会(編), 2001: 38]

このような推定の手掛かりとなるのは、先に示したように、同祭礼がそもそも藩主出資金を元手に藩主導で始められたという点や、祭礼行列が城内で藩主・重臣の上覧に供されたことなどから、藩主催で厳格に催行される官祭としての性格が濃厚であったという点である。その祭礼次第は以下のようなものであったという〔福原，2003: 137〕。

8月1日に藩士は藩主に拝賀し、八幡宮祭礼に関係する町々は音曲の稽古を始める。

8月9日の明け方、八幡宮神輿は八幡町内の御旅所へ渡御し、御旅所へは藩主の名代として加判奉行に続き町老・町吏が参拝する。

8月15日の明け方、藩主の名代として加判奉行が御旅所へ参向するのに合わせて、各町の出し物が随行し、八幡宮境内を一巡したのち、京口門前まで行列する。神輿は八幡町の若者によって城下町を巡行する。昼過ぎに、出し物を先頭とし神輿が殿をつとめる行列が京口門より城内に練り込み、丸之内を一周して京口門より出る。その際、「藩主が在城の時は、沐浴斎戒して城西の物見亭に登り、一族や重臣と共に神輿を礼拝し、祭礼行列を見物する。主だった家臣たちもその近辺に設けられた棧敷に礼服用で居並んだ。」その後神輿は各氏子町を練って八幡宮に還幸する。

上記下線部に示したように、祭礼次第の主要部分は藩主をはじめとした藩役人衆がつねに関わっており、この祭りが高虎の宗教的権威を確認するための藩を挙げての祭りであったことを如実に物語っている。さらに、明暦年間（1655～1658年）の同祭礼が記されている『勢陽雜記』には「式年の次第を定める」との表現があることから、「毎年の執行という解釈は難しく、式年とは隔年の藩主在国年に賑やかな祭礼を行」っていたと考えることもできる〔福原，2004: 107〕。これらを考え合わせると、絵図に描かれた見物人なき祭礼行列は、ちょうど大名行列のような厳粛さで執り行われ、沿道の町人たちは無礼打ちを恐れて無遠慮な見物をはばかりような性格の行事だったのではないだろうか。絵図に描かれた無人の町並みを粛々

と進む祭礼行列、それは官祭としてのこの祭りが「神君高虎公」の威光を誇示し再確認するための国家祭典として位置づけられていたことを表していると考えられる。

## 2) 城和領と春日若宮祭礼

城和領は、藤堂藩領の西端にあたり、現在の地名でいうと奈良盆地を中心として東の山辺郡、南の桜井市、それに京都府南部の相楽郡を合わせた地域に点在した多数の飛び地領の集合体であった。藤堂藩にとって城和領は、奈良から大坂へ米を移送し、また大坂からは塩や藍玉を入手する流通の要路としての役割を担った。それと同時に、ここは藤堂藩が幕府の家臣として奉公する上での政治的（行政的）に重要な場であり続けてきた。

まず、藩政初期には先に述べた朝廷工作のための「在京賄領」〔東谷，2009: 103〕、すなわち伊賀国から京都までの移動経路としての政治的な重要性を帯びていた。また、山城の領地は、大坂の陣以降に荒廃した大阪城を復旧するために幕府より課された大阪城普請において、資材となる石材の供給地としての重要性を担った〔東谷，2009: 103-104〕。さらに、二代高次以後は、河川の流出防止を管轄する「土砂留め制度」において、山城・大和を中心とする流域の河川管理役を遂行するという幕府広域行政上の役割を担った<sup>(15)</sup>。

こうした城和領の政治的重要性は、大和国の中心的な祭りである春日若宮祭礼への奉仕にも通じる。

藤堂藩の城和領は、山城国相楽郡の約1万2千石と大和国数郡を合わせた約3万7千石からなっており、その大半は奈良盆地とその東部の山地であった。近世の大和国は、興福寺・春日社などの寺社領に加えて、幕府領をはじめ柳生・藤堂・郡山ほかの各藩領がモザイク状に入り組んでおり、大変複雑な所領配置で構成されていた。したがって、藤堂藩にとって城和領は、伊賀の上野城下町から山を越えた先にある飛び地領であり、しかもそれはまとまった一円領ではなく村単位の領地が点在するかたちで存在していたわけである〔図5〕。とはいえ、ここは公儀との関係において政治的（行政的）に重要な地であるため、城和領の支

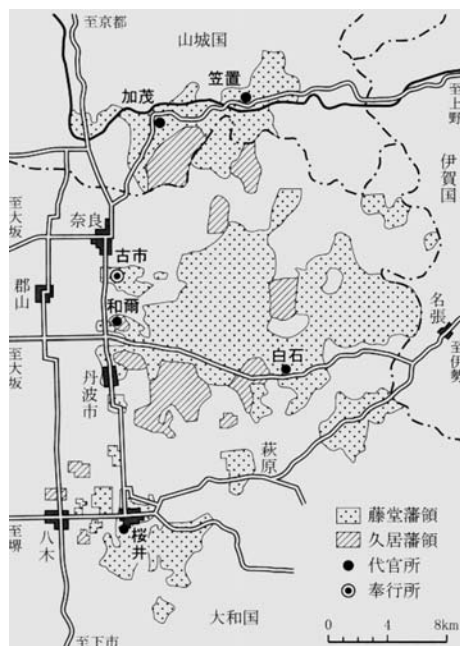


図5 城和領域図 [伊賀市, 2016: 80]

配は、上野城代のもとに城和奉行（大和奉行）が定められたが、この職は「伊賀上野城付では最上位に属する職の一つであった」という〔奈良市史編集審議会（編），1986: 83〕。のちに延宝5年（1677）以降は、興福寺南郊の古市に城和奉行所が設置されて役人ともども常駐し統治にあたった。

そして、この大和国の年中行事を代表するもののひとつが「春日若宮祭礼（おん祭り）」であった<sup>(16)</sup>。この祭りの起源は保延2年（1136）に遡るとされ、春日大社の摂社である若宮社の祭祀として毎年暮れの11月26日に祭神渡御（若宮の神を興福寺領東端の御旅所まで迎える行事）を中心とする各種行事が盛大におこなわれてきた。近世にさしかかるまでのこの祭りの発達には「衆徒」「国民」といわれた大和武士が大きく関わっており、「かれら武士は十一月の収穫が終わったころの領民を率いて祭礼を主催したから、それ以来大和の民衆の祭りとしての性格を強くし、この祭礼のなかで流鏑馬・田楽・猿楽が大きな位置を占めるようになった」という〔奈良市史編集審議会（編），1986: 236〕。

このように、武家主導で大和国の民の心を掴む

祭りという性格をもつにいたったことから、大和武士の没落後も豊臣秀長によって祭りが再興されるなど、武家による大和国支配にとって重要な祭りとみなされてきたのである。

そして江戸時代になると、この祭りは徳川將軍家によって興福寺とともに主催されるようになる。

徳川將軍家は、長谷川党の者を願主人とさせ、大和国中の大名に儀仗を出させ、金春・金剛・宝生の三座に若宮祭に奉仕することを命じて二〇〇石を給し、楽人や細男にも装束料を与え、これら芸能人に名字帯刀を許して士分格にとりたてた。

[奈良市史編集審議会（編），1986: 236]

祭礼の際には、幕府直属の奈良奉行が將軍の代官・祭礼の主催者として渡御の行列を観覧し、大和国に領地をもつ諸大名はさまざまな懸物（御贄）の献納を課された。それら懸物の総数は、元和元年（1615）時点で雉1,268羽・兎136耳・狸143疋・鯛100枚・樽160荷であったという〔奈良市史編集審議会（編），1986: 237〕。また、渡御行列の最後には「前後役人諸士行列」（大名行列）が付くようになり、長柄（槍）持ちをはじめ、挟箱や弓矢を持つ徒歩の諸士や「乗込馬」「将馬（いさせうま）」など多彩な出し物を各藩が用意することになっていた。それはまさに「軍事パレード」と呼んで差し支えないものであったろう。

これら祭礼役は、おおむね諸藩が大和に与えられた領地高に比例して課された。そのなかで、藤堂藩が担った祭礼役は具体的にどのようなものであったのかは、伊賀城代家老の役目記録である『永保記事略』から窺い知ることができる。当時この祭りは「南都御祭礼」と呼ばれ、ほぼ毎年11月の条に祭礼出仕に関する報告が記載されている。そこから見えてくるのは、馬13頭<sup>(17)</sup>・侍中5名<sup>(18)</sup>が上野城下から出張し、現地では城和奉行が観覧に出ていたらしいということである。このときの馬は、松の下で披露される将馬に用いられたと思われる、大房などで豪華に飾り付けられ



図6 「松の下」での渡し物の様子〔幡鎌・安田, 2016: 121〕

ていた。「松の下」とは、11月26日の若宮神輿の還幸後、翌27日に春日大社一の鳥居前に用意された渡し物の場であり、奈良奉行をはじめとして衆徒や興福寺僧らが観覧するなか、猿楽や競馬などさまざまな渡し物が披露された〔図6〕。図中右上には、郡山・高取家中に挟まれて「伊賀家中」が、家紋の入った槍<sup>(19)</sup>を掲げた槍持ちとともに大名行列の出番を控えているのが見える。さらに、こうした渡し物の出演者以外にも、先述の懸物の献納や警護の供回りたちも当然付随しただろうから、じっさいには記録された以上の負担だったと思われる。

このように、春日若宮祭礼は幕府による「公儀の官祭」として執り行われていたのであり、大和国に領地をもつ藤堂藩は（他の諸藩と同様に）この祭礼への供奉・奉加を幕府から命じられた「国役」としてこなす必要があったのである。これが、藤堂藩の藩世界における城和領の祭りの意味であった。

### 3) 伊賀と上野天神祭

藤堂藩領の中央部に位置する伊賀の上野城下町は、津城下町と並ぶ藤堂藩の二大中心地のひとつ

だった。藤堂藩の藩政史料である『宗国史』には「伊賀に移封し、伊勢十萬石の地を併有す」とあり、移封当初の段階では伊賀が藤堂藩の本拠として認識されていたほどであった〔東谷, 2014: 44〕。

先述のように、高虎による上野城下町建設は関ヶ原直後の軍事的緊張下に設計されたものであり、上野城のつくりや城下の町並みにおいてさまざまな軍事的配慮がみられるが、同時に高虎はここを商業都市として明確に位置づけてもいた。

伊賀国は、伊勢・大和・山城・近江の四ヶ国と接し、それぞれ山地によって隔てられた自然の要害であるとともに、その中心地である上野城下町は交通の要衝でもあった。上野城下町は、幕府が管轄する脇街道であった大和街道が東西を貫き、津城下へと至る伊賀街道、南へは名張街道と阿保街道が城下から直接伸びるほか、北の近江に抜ける甲賀街道や伊賀南部を東西に走り伊勢参りに用いられた初瀬街道とも間接的に接続し、東西南北につながるスポークを束ねるハブ・シティの位置にあった〔図7〕。

そこで、高虎をはじめ藤堂家歴代藩主は、伊賀国内で上野町（上野城下町）に対して、商売免許

の地とするとともに、諸役免除の免許状を発給し続けた。とりわけ、城下のメインストリートであり大和街道・伊賀街道の一部となっている三筋町(本町筋・二之町筋・三之町筋)〔図8〕については、地代である地子が免除され、宿場役としての伝馬人足維持のために補助するなど、特権商売地

における商人保護を積極的におこなった〔伊賀市, 2016: 338〕。その後、幕藩体制が安定し、当初の軍事的要害としての機能が薄くなったのちは、藩主の津からの越国や諸藩の参勤交代、また伊勢参りや富士山参詣・西国巡礼のための要路としてこれらの街道は藩内外の人々の交通で賑わい、その途上の結節点にあたる上野城下町は宿場町として栄えた。

そしてこの三筋町において上野天神祭が発達した。『永保記事略』には、万治3年(1660)に、おそらく城下三筋町の町人からと思われる「天神祭礼再興伺」がみえるが、これが同祭にかんする最古の記録とされる〔上野市古文庫刊行会(編), 1974: 24〕。この祭り再興願いは、高虎による城下町建設と天神宮の現在地への移転および城下鎮守神としての扱いが始まってからおよそ50年後に出されたわけだが、先に触れたようにすでにその数十年前の寛永12年(1635)に津では、二代高次による八幡宮祭礼創設をみている。また、これよりおよそ100年近く前の織豊期にあたる天正13年、筒井氏がこの地を領していた頃に天神祭が創始されたとの言い伝えがある〔上野市教育委



図7 伊賀の主要街道〔伊賀市, 2016: 495〕

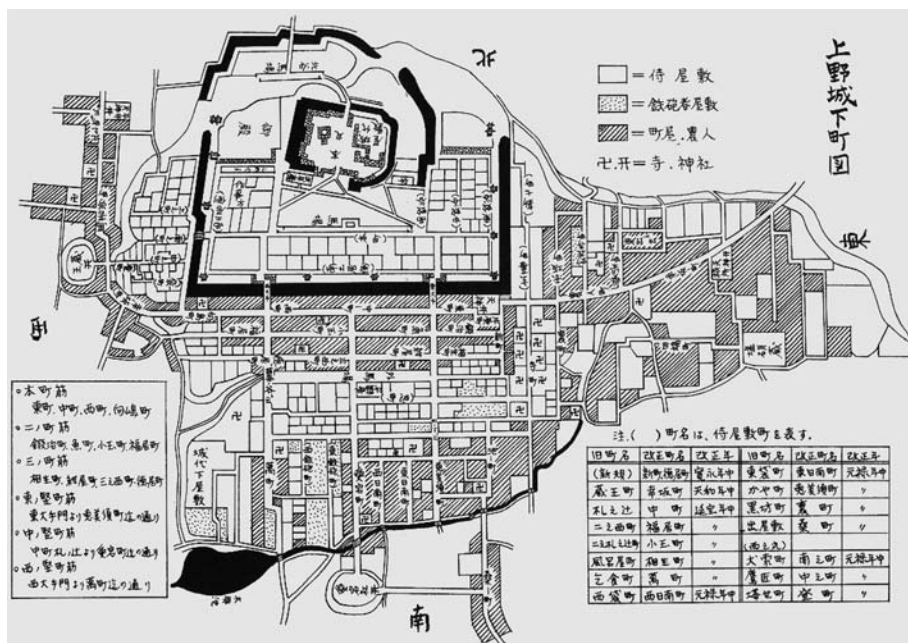


図8 江戸時代の上野城下町〔福井, 1974: 42〕

(図中、城の外堀南側を東西に走る筋が、北から本町・二ノ町・三之町の「三筋町」。)

員会（編），2001: 272]。これらを考え合わせると、万治3年の時点まで上野城下の祭礼は、筒井氏以降の戦乱のなかで途絶えていたところ、高虎によって新たに建設された城下町において商人保護のもとで財力を蓄えた三筋町町人たちが、津の八幡宮祭礼にならって自分たちの祭りを再興することを望んだという事情が浮かび上がってくる。

近世における上野天神祭の祭礼行列がどのようなものであったのかは、津八幡宮祭礼のような行列次第の記録が残っていないので、その巡行経路を含めた全容はわからない。ただ、元禄前の貞享5年（1688）に三代藩主高久による上覧が初めてなされたときの記録から、当時の練物のおおまかな姿がわかる[植木，2001b: 332]。9月25日の本祭当日、上野城の西大手門から城内入りした祭礼行列は、藩主の上覧用に設けられた仮御殿前でそれぞれの芸を披露した。その様子は、伊賀加判奉行の覚書である『統集懷録』に記されている。それによると、まず「町々ノ押<sup>(20)</sup>トモ」が杖を突きつつ先導し、次いで「神主、いち、宮坊」が馬に乗って通りその後を神輿が渡る。そして「鹿」「石引」のパフォーマンスが披露される。植木によれば、「鹿」は「鹿頭を被った腰鼓姿の踊子に特色をみせる風流拍子系の渡物」で、北野天満宮（上野天神宮の本宮にあたる）の渡物に学んだのではないかという[植木，2001b: 333]。また、「石引」は「作り物の石を大勢で曳き歩き要所でパホ（ママ）ーマンスを繰り広げたもの」と思われる[植木，2001b: 332]。いずれにせよ、これら神輿の後に披露される芸は、その内容からみて城下の町人たちによる風流と思われる。そして最後に、「作り花、牡丹、梅、菊」が献上され

るが、これらは「縁起物として献上された」造花のようなものであったのだろう[植木，2001b: 334]。これも、「町ノ者とも御慰ニ上候へハいかかと申候」とあるように、町人たちから藩主へ献上されたと思われる[植木，2001b: 332]。そしてこれらを藩主高久は、城内石垣上に特別に建てられた仮御殿から眺めたのであった。

その後、上野天神祭の練物は大きく発達する。上記の高久上覧から間もなくの元禄3年（1690）、「神事のねり物」に「増長天」を作り出したとの記事が残っている[久保，2001: 258]。おそらくそれ以降、元禄期に鬼行列の練物が三筋町三之町筋の三ヶ町（紺屋町・相生町・三之西町）によって出されるようになったと思われる<sup>(21)</sup>。また、その後「印か山車らしき物があらわれるのは享保年間とされ『だんじり』という文字は、寛政九年（一七九七）が初出である」という[白井，2001: 170]。したがって、おそらく文化・文政期（1804-1830）には、本町・二ノ町筋の各町が曳山を作り上げることで現在につながる二層式四輪型屋台の楼車<sup>(22)</sup>が完成し<sup>(23)</sup>、祭礼行列を最終的に確立することになったのだろう[図9]。

こうして、上野天神祭は曳山祭へと発達した。一般に城下町祭礼の発達は、神社神輿の渡御を核にそれを囃すさまざまな出し物（風流）が氏子町民から付け加えられ、神輿の前／後に供奉する練物行列が形成されることから始まる。この風流（ふりゅう）は、初期の段階では簡素な作り物や踊りや仮装などから、やがて鉦・屋台・山車などの祭礼用車両へと発達するとともに、その造作や装飾が豪華となり、そして現代に受け継がれるよ



図9 「伊賀上野天神宮祭礼九月廿五日行列略記」[上野市教育委員会（編），2001]（天保11年に作成された版木で、江戸後期の同祭を描いた唯一の資料といわれる。）

うな祭礼行列の完成形へと発達する。上野天神祭は、そうした近世城下町祭礼の典型的な発達過程を辿ったのである。

### 3. 藤堂藩の藩世界における 三祭礼の位置づけ －藩祭・公儀祭・民祭－

以上、藤堂藩の藩世界を伊勢・城和・伊賀の3つに分け、それぞれを代表する祭りである津八幡宮祭礼・春日若宮祭礼・上野天神祭について、その特徴を藩世界上の位置づけを念頭にみてきた。ここであらためて、上野天神祭を中心にみた他の二祭礼との相対的な藩世界上の位置づけの違いをまとめておこう。

#### 1) 上野天神祭と津八幡宮祭礼－民祭／藩祭－

まず、上野天神祭と津八幡宮祭礼との違いであるが、上野天神祭はその出発点において津八幡宮祭礼と対照的な経緯で始まったということがいえる。すなわち、津八幡宮祭礼は「神君高虎」の威光を顕彰すべく、藩主催の官祭（「藩祭」）として始められたのに対して、上野天神祭は経済力をつけた城下町人によって再興が願われ、それを藩が許可するかたちで開催される「民祭」として出発したと考えられる。

もちろん上野天神祭においても、祭礼行列が城内に入り藩主をはじめとする重臣らの上覧に供されたし、祭りに対する儉約令や開催延引などの規制が藩から下されることはあった。とはいえ、藩主の上覧は藩主の「越国」すなわち津から上野へ訪れた際に時期が合った場合に限られ、しかもときには家臣のみに観覧を命じることすらあった<sup>(24)</sup>。また上野天神祭は、藩からの延引命令はあっても途切れることなく毎年開催されていたのに対して、すでに触れたように津八幡宮祭礼では、参勤交代で江戸と行き来する藩主の在国年のみにおこなわれていたようなのである。

また、祭礼行列のその後の発達過程においても、両祭礼の違いは明らかであった。すなわち、上野天神祭の場合、初期の簡素な練物からやがて元禄期には鬼行列が付け加わり、そして化政期になると豪華な曳山（楼車）が祭礼行列の花形とし

て登場するという、城下町祭礼の典型的な発達の道筋を辿ったのである。いっぽう津八幡宮祭礼の場合は、もちろん祭礼行列における練物は城下町民によって担われたという意味では惣町祭礼であったし、最初期の段階からすでに27～8町が関わり[福原, 2003: 153]、総勢1,200人もの大行列をなしていたというから、規模の点では上野天神祭をはるかに凌駕していたはずである[樋田, 2001: 11]。また、その後の出し物の変化をみると、初期（明暦年間）の「ほとんど真似の行列」で構成されていた出し物から、後期（天保時点）にはそれにかわり「車台」や「車引」などの曳屋台が登場するようになった[樋田, 2001: 11]。とはいえ、上野天神祭のような二層式四輪型屋台の豪華な曳山が登場するには至らなかった。この点について樋田は以下のように考察している。

江戸後期、行列中に「曳き物」や「釣り物」（屋台など）が多くなることは他国と軌を一にするが、津祭礼の場合は城の「京口門」通過の制約がある。背の高い町印などは斜め倒しなどで通ることは可能だが、祇園会や山王祭のような高鉾や高欄山車は到底望みえないのである。豪華さを表そうとして屋台を凝らすなど苦心しているが、城門の制約は大きな課題であった。[樋田, 2001: 12]

津八幡宮祭礼においては近世を通じて曳山の発達がみられなかった<sup>(25)</sup>。上記において樋田はその理由を、城入りにおける城門の高さに制約があったからとしているが、上野天神祭も同様に城内入りをしており、そのために楼車の屋根を上下させる「万力<sup>(26)</sup>」を組み込んでいたのである。したがって、技術的に決して不可能であったわけではなかった。

したがって、津八幡宮祭礼において「高鉾や高欄山車は到底望みえない」ことの理由は他に考えるべきだろう。それは、同祭の藤堂藩世界内での位置づけ、すなわち「神君高虎」およびときの藩主の威光を再確認するために行われる「藩祭」であったということが大きく関わっていたはずである。

津八幡宮祭礼における祭礼行列において、その出し物の趣向<sup>(27)</sup>は、初期においては大名行列の真似や仙人の真似など「ほとんどが真似の行列もの」で占められていたのが、江戸後期になると「『能』を素材とする町が多く」となるという変化を示している[樋田, 2001: 11-12]。この変化は、津町人たちの文化度の高さを反映しているのは当然であるが、それと同時に、津町人のみならず「藩上層部・家臣の嗜好を反映している謡、謡曲の世界を中心に」[福原, 2003: 154] 構成されるというコードに則っていたとみることができる。出し物の趣向は藩主の嗜好を考慮し、テーマ性とストーリー性をつねに重視していたのである<sup>(28)</sup>。その点において、この祭りは「藩祭」、すなわちなによりもまず藩主に対して披露すべき奉祝行事であったといえるのである。

これに対して上野天神祭の出し物の場合は、テーマ性とストーリー性を重視した練物として三之町筋の鬼行列が元禄期以降現在にまで一貫して伝えられているが、本町・二ノ町筋においては、江戸中期以降になると商業地区ならではの縁起物を各町それぞれが工夫し<sup>(29)</sup>、やがて文政期(1804-1830年)頃になるとすべての町が楼車を出すようになる。

こうした両祭礼における出し物の変遷を比べると、両者の祭礼としての性格の違いは明白であろう。すなわち、津八幡宮祭礼は藩主催の威儀を正して催行される「藩祭」として位置づけられていたのに対して、上野天神祭は城下町人主導の「民祭」として、彼らの経済力と創意に任せられており、領主側はそれをもっぱら見物する立場にあったということである。藩庁城下町であった津においては、祭りは藩主の威光を示す機会という政治的重要性を帯びていた。それに対して、商都として位置づけられていた上野城下町においては、祭りは城下町民たちの経済力と自由な祭り創造のエネルギーに放任されていた。このような両城下町の藩世界内における位置づけの違いが、両祭礼の発達の道筋の違いを生み出したのである。これが、上野天神祭において曳山の登場をみることになった政治経済的要因であったと考えたい。いわば、最初から「民祭」として始まり、藩にとって

は見物対象であったことが、祭りの自由な発達を許したのであった。

## 2) 上野天神祭・津八幡宮祭礼と春日若宮祭礼－民祭・藩祭／公儀祭－

上記で検討した上野天神祭・津八幡宮祭礼と比べると、城和領における春日若宮祭礼が藤堂藩にとって有していた位置づけは大きく異なる。一言で言うと、伊賀・伊勢の両祭礼は藩主の上覧に供される惣町祭礼であったのに対して、城和の春日若宮祭礼は奈良奉行すなわち幕府主催の祭礼であり、藤堂藩にとっては他の大和国諸藩とともに祭礼行事に出仕する義務を有する「公儀祭」なのであった。

そのことは、『永保記事略』における同祭礼(「南都御祭礼」)に対する記事が、上野天神祭に比べて圧倒的に多いことから窺える。またその記述も、「勤番」「出役」などと記され<sup>(30)</sup>、これが藤堂藩にとって幕府に対して果たすべき役目として認識されていたことがわかる。

そもそも春日若宮祭礼(おん祭)は、春日社の摂社である若宮社の祭礼であり、勅祭である春の春日祭に対して冬におこなわれ、神宮寺として春日社を支配していた興福寺の祭りとして、平安時代後期の保延2年(1136)始まった。その開始の事情は、当時大和国一円に広がっていた興福寺の荘園領が国衙領化されることへの危機感にあったという<sup>(31)</sup>。それだけに、「おん祭は当初から大和一国を意識した祭」であり、「大和一国が致斎の対象」となってきた[幡鎌・安田, 2016: 18]。またその行事も、6月初めの流鏝馬定から11月末の松の下の渡りまでじつに多彩で同時進行することもあるゆえに、「数年を経ないと見尽くすことができない」ほどのものであった[幡鎌・安田, 2016: 100]。さらに、雉・狸・兎・塩鯛などの供物(「掛物」)や馬をはじめ甲冑・弓矢・槍などの奉納物が大量に寄進されることが必要でもあった。

このような「大和一国を致斎の対象」とする春日若宮祭礼は、近世以降この祭りを主催するようになった幕府にとっても、寺社や大名の所領が錯綜し、地侍(大和武士)などの多様な権力が交錯

する大和国を統治する手段として重視されたのであった。

したがって、同祭に対する奉仕は、大和国に領地を有する諸藩の連帯責任で果たすべきものであったらしい。例えば、大和国最大の領地（当時12万石）を有する郡山藩において、元禄8年（1695）に藩主本多忠平が死去し、忌中につき祭礼役の人馬を出せなくなった際に、藤堂藩にその代役として「増馬」が命じられ、伊勢から差し出すことで応じている<sup>(32)</sup>。

このように、藤堂藩の藩世界において、城和領は藩領の一部でありながら幕府の監督下にある大和国の一部としての意味合いを帯びており、その文脈上に「南都御祭礼」すなわち春日若宮祭礼が位置づけられていた。したがって、藤堂藩にとって春日若宮祭礼は、津八幡宮祭礼と上野天神祭があくまでも藩内の祭礼であったのに対し、幕府から課された国役として奉仕すべき「公儀祭」なのであった。

### おわりに

#### －藤堂藩の藩世界における上野天神祭－

以上、藤堂藩の藩世界は、小宇宙盆地というレンジにおいて、津城下町を中心とする伊勢・上野城下町を中心とする伊賀・大和国を中心とする飛び地領としての城和領の三地域に分けることができ、それぞれを代表する祭りであった津八幡宮祭礼・上野天神祭・春日若宮祭礼の三祭礼を比べた場合、各々の地域が藤堂藩にとって有していた地政学的特性に応じた藩世界上の位置づけの違いがあった。

すでに記したように、津八幡宮祭礼は藤堂藩の「藩祭」、春日若宮祭礼は幕府の「公儀祭」としての性格を基本的に有しており、それぞれ自藩と幕府と祭礼が指向する対象は異なれど、どちらも藩にとっての公式行事として滞りなく務めるべき「役としての祭り」[吉田, 2020]という性格を有していた。これらに対して上野天神祭は、城下町民が願い、彼らが工夫を凝らした練物を次々に生み出すことで盛大な祭礼行列が発達していったのであり、藩主および藩の重臣たちは上野城内においてそれを楽しみとして見物する側にあったので

あった。

また、『永保記事略』のなかには上野天神祭と春日若宮祭礼の記事がみえるが、その記述の分量と内容からは、両祭礼の藩にとっての位置づけの違いが明確に読み取れる。上野天神祭に比べて春日若宮祭礼のほうが記述が倍近くあり、また比較的規則的に毎年の人馬等の出仕が記録されている。それに比べて上野天神祭の記述は、藩主の上覧や下賜物、あるいは開催延引の記録となっている。こうした祭礼関連記事の違いからも、春日若宮祭礼が藩にとっての公的役目の対象であり、上野天神祭は城下町民による見世物として民政上の取扱い対象に留まっていたことがわかる。

あらためてまとめると、藤堂藩の藩世界において、津八幡宮祭礼は「藩祭」、春日若宮祭礼は「公儀祭」、上野天神祭は「民祭」として、それぞれの藩政上の性格は大きく異なっていたのである。そしてそのことが、上野天神祭において曳山（楼車）が十分に発達した理由への答えとなる。もとより公儀祭であった城和の祭りについては、それが民衆の関与に頼むようになるのは明治以降を待たなければならぬ[幡鎌・安田, 2016: 150]。そこで津と上野の祭りを比べると、どちらも城下町の惣町祭礼ではあったのだが、津八幡宮祭礼における祭礼行列はなによりもまず藩主に対して披露すべきパフォーマンスだったのであり、藩上層部の趣味に適うようなテーマ性とストーリー性のコードに縛られていた面が強かった。ところが、上野天神祭は城下町民主体の祭礼行列であり、藩主および家臣たちにとっては「気が向けば」見物する娯楽のひとつとして（儉約令は別として）半ば放任されていた。そうした藩世界内の位置づけのおかげで、三筋町町人たちはその経済力と商業ネットワークの下で当時最新の祭礼文化を積極的に取り入れることができた。それが祭礼練物の自由な発達を可能にし、近世城下町祭礼の典型的な発達を可能にした。その到達点が、化政期に完成した楼車たちだったのである。

### 注

- (1) 「印は町々の出し物の先頭に立つ作り物であり、練物を出す町内を表示する『町の標』とみなされ

- ている。…本質的には印こそが山・鉾・屋台の祭りの核心をなすものであり、鬼行列や楼車は印に付いてそれを賑わし囃す存在だったのである。」[植木, 2001a: 246-247]
- (2) 「練物や出しや作り物（曳物・担ぎ物など）から山・鉾・屋台への展開は近世の都市祭礼が等しくたどった道程だったのである。」[植木, 2001a: 246]
- (3) ただし、北陸地方の曳山祭に詳しい宇野によれば、「これらの由来にはいくつかの問題が残る」としているものの、「御車山が前田利長の時代に始められたことは確か」だとする[宇野, 1997: 137; 142]。
- (4) 「前期のような屋台では、享保六年の町触に抵触してしまい、せっかく造ってもすぐに禁止されることは自明です。そのため、前期屋台の機能を二基の屋台に分散することによって、町触をかわそうとしたのではないのでしょうか。」[作美, 1996: 113]
- (5) 天下祭りが徳川吉宗の享保の改革によって規模縮小された事情について、作美は吉宗の個人的嗜好の影響を指摘している。「紀伊家には豪華な曳山を好み風潮があったのかもしれませんが。このような状況のもとで育った吉宗にとって、一〇〇基にも及ぶ豪華な（悪く言えば派手な）曳山を見ることは、彼の意にも反するし、さぞかし退屈だったのではないのでしょうか。」[作美, 1996, 88]
- (6) ただし、正確にはこれに伊賀南部の名張2万石と、津南部の久居5万石、それに関東下総3000石が加わるが、名張は藤堂本家に対する支流の名張藤堂家（藤堂宮内家）が家臣として代々治め、久居は築城を許されなかったものの、大名格を有する支藩（久居藩）であったことから、いずれも藤堂本家の直接支配する世界に含めずに論じる。
- (7) 「なお藤堂藩という藩名であるが、従来は津藩・安濃津藩などともよばれたが、藩領が伊勢国内八郡以外に伊賀一国・山城国相楽郡・大和国内四郡・下総国香取郡にもひろがることから、小著では特定の地名を冠することを控えた。」[藤田, 2009: 5]
- (8) ただし、上野城の天守閣は建設途中の慶長17年（1612）に暴風雨のため倒壊し、以後再建されぬまま無天守の城として幕末を迎えた[伊賀市, 2016: 31]。とはいっても、その堅固な石垣や掘割と城内屋敷等はそのままで、軍事施設としての機能にならん支障はなかったはずであるから、実質的に「一国二城」を幕府から特例として容認されていたとみるべきだろう。
- (9) 藤堂藩の藩世界研究の先鞭をつけた深谷克己は、これを「〈総合研究型〉の藩政史」と呼んでいる[深谷, 2002: 7]。
- (10) 例えば、伊賀と伊勢について、「現在でも、同じ三重県でありながら、伊賀と伊勢では言葉や文化が違うことは夙に指摘されている」[東谷, 2014: 44]。
- (11) このうち、津は伊勢湾に面した港町であり、「盆地」とするには違和感を覚えるかもしれないが、この点についても米山は、「沿岸に認められる大小の入江の奥の河口の沖積原を中心に三方を山に囲まれた地域も、いわば小盆地宇宙を半分に切断して、その半ばを海に譲った形、つまり擂り鉢状の半分が海になっていると考える」ことでその文化的ユニット性を捉えるべきだとしている[米山, 1989: 15]。
- (12) 「これは、高次の指示を受けて…城代・家老ら藤堂家重臣が連名で伊賀・伊勢・城和領の各加判奉行に発給したものであり、藤堂家の地方支配の基本理念を示したものであった。」[伊賀市, 2016: 64]
- (13) ちなみに、伊賀上野における藤堂家菩提寺は城下寺町の上行寺であり、歴代藩主の位牌が祀られている[上野市（編）, 2002: 745]。
- (14) 現在おこなわれている祭りは「津まつり」であり、同祭 HP [津まつり実行委員会 HP] では津八幡宮祭礼を起源とする「約380年の歴史を誇る伝統行事」とされるが、これは戦後の昭和43年（1968）に津市が主導し観光振興祭として立ち上げたものである。近代以降における八幡宮祭礼は戦時下で中断し、また市街地の7割以上を失った空襲の際に「各町の山車や屋台はすべて焼失」してしまっており、伝統祭礼としての連続性はこの時点で完全に途切れている。
- (15) 「藤堂藩は山城国相楽郡と大和国添上・式上・山辺・広瀬・式下の各郡を管轄し、定期的な土砂留め役人の巡回に加え、植林などの土砂流出防止策をとった。藤堂藩の管轄下には藤堂藩領以外の村も含まれるが、領主に関係なく土砂留めが実施された。」[東谷, 2009: 110-111]
- (16) 「年中行事のなかでも、奈良を代表するものといえば、やはり『おん祭り』と『薪能』と『お水取り』とであろう。」[奈良市史編集審議会（編）, 1986: 235]

- (17) 延宝7年(1679)11月11日の条に「南都御祭禮御家中々例は十三疋二有之候」とある〔上野市古文献刊行会(編), 1974: 81〕。
- (18) 寛文11年(1671)11月12日の条に「侍中も五人相増都合十人出候事」とあるが、これは郡山藩主本多正勝の死去による祭礼不出仕にともなう臨時の措置である〔上野市古文献刊行会(編), 1974: 55〕。
- (19) 「津藩は烏毛の槍鞘に槍印は紙五枚、槍持ちは対の場連草の羽織に銀色の張抜の笠」であったという〔幡鎌・安田, 2016: 127〕。
- (20) 「押(おさえ)」とは、「行列のしんがりを勤める者」〔植木, 2001b: 333〕ということらしいが、ここでは記述の順序から行列の先頭と思われる。
- (21) さらに後には、「徳居町民による上野天神祭練物への参加は、三之町三ヶ町に百年程遅れて参加したと伝えられ、その時期は寛政年間(一七八九～一八〇一)といわれている」〔久保, 2001: 260〕。
- (22) 「ダンジリを『楼車』と書くようになったのは明治以降のことである。早くは『だんじり』、文化の頃から『台尻』『壇尻』と表記されるようになる。」〔植木, 2001a: 257〕
- (23) 「関連史料が文化から文政にかけて集中的に残ることから、楼車の多くは一九世紀前期にほぼ完成をみたものと考えられる。」〔植木, 2001a: 258〕
- (24) 「天神祭礼御覧無之 老中其外例年見物致候者ハ無用是迄見物不仕候者共御用屋敷へ見物候様被仰出」〔上野市古文書刊行会(編), 1974: 119〕
- (25) 上野天神祭に比すべき曳山が登場するのは、藩政期が終了し明治期以降を待たなければならない〔まつり・祭・津まつり展実行委員会(編), 2006: 98-99〕。
- (26) 「巻取万力」「すり揚げ万力」などと呼ばれ、現存する楼車では鍛冶町の「二東」・福居町の「三明」に残っている〔上野市, 2002: 846; 852〕。
- (27) 江戸時代を通じて、各町出し物は1番から10番に分かれていた。その前期・後期における具体的な出し物一覧は樋田〔2001: 9〕を参照。
- (28) 例えば、江戸時代後期の祭礼行列を描いた「伊勢津八幡宮祭礼図巻」にある山之世古町の練物〔まつり・祭・津まつり展実行委員会(編), 2006: 53〕は、主題が「出世山姥」で、2挺の鉞をぶっちがいにした町印+供の猿に曳かれた四輪台の上に熊(?)の背中に乗る「金時」+「婆」を乗せた担ぎ屋台という「一連の構成で足柄山の金太郎のストーリーを見せる」〔植木, 2001a: 254〕。
- (29) 例えば、享保16年(1731)には中町が「鷹匠」から「幌武者」に変更した〔上野市古文書刊行会(編), 1990: 31〕が、宝暦元年(1751)には小玉町が「七福神」に替え〔上野市古文書刊行会(編), 1990: 94〕、宝暦6年(1756)には向島町が「花鉾」に替え〔上野市古文書刊行会(編), 1990: 122〕、そして宝暦9年(1759)には中町から「其神山」(おそらく最初の楼車)が出される〔上野市古文書刊行会(編), 1990: 140〕。
- (30) 例えば、「南都御祭礼勤番 仲ヶ間申談之上順番等之定出来候之事」(寛永21年1月23日)、「南都祭礼出役并出馬等之義書付を以被 仰出之」(寛永21年9月2日)など〔上野市古文献刊行会(編), 1974: 524-525〕。
- (31) 「興福寺の僧たちは、国司支配の再現に反対し現状の承認・継続を求めて朝廷に『大訴』を起こした、そしてその訴訟が達成されるようにと春日若宮神に『立願』しておん祭を始めた、あるいは『大訴』が勝訴に終わったことの報賽としてのおん祭を始めたと考えられるのである。」〔幡鎌・安田, 2016: 18〕
- (32) 「南都御祭礼之時分郡山方御忌中ニ付人馬務不申候而増馬之儀伊州江申来候ハ、先年之通伊勢附る出し候様被 仰出候事」(元禄8年11月14日)〔上野市古文献刊行会(編), 1974: 171〕

## 参考文献

- 市川秀之・武田俊輔, 2017, 『長浜曳山祭の過去と現在－祭礼と芸能伝承のダイナミズム－』おうみ学術出版会。
- 植木行宣, 2001a, 『山・鉾・屋台の祭り－風流の開花－』白水社。
- 植木行宣, 2001b, 「上野天神祭の成立と発展」上野市教育委員会(編)『上野天神祭総合調査報告書－三重県指定無形民俗文化財－』: 328-346。
- 上野市(編), 2002, 『上野市史－民俗編 下巻－』。上野市教育委員会(編), 2001, 『上野天神祭総合調査報告書－三重県指定無形民俗文化財－』。
- 上野市古文献刊行会(編), 1974, 『永保記事略－藤堂藩城代家老日誌－』同朋社。
- 上野市古文書刊行会(編), 1990, 『上野町旧記目録』同朋社。
- 宇野通, 1997, 『加越能の曳山祭』能登印刷出版部。
- 伊賀市, 2016, 『伊賀市史 第二巻－通史編 近世－』。
- 久保文武, 2001, 「鬼行列の成立」上野市教育委員会

- (編), 2001, 『上野天神祭総合調査報告書－三重県指定無形民俗文化財－』: 256-261。
- 作美陽一, 1996, 『大江戸の天下祭り』河出書房新社。
- 白井進, 2001, 「印と桜車の懸装品」上野市教育委員会(編), 2001, 『上野天神祭総合調査報告書－三重県指定無形民俗文化財－』: 170-208。
- 菅原洋一, 2009, 「『津八幡宮祭絵巻』の世界」三重大学歴史研究会(編)『藤堂藩の研究－論考編－』清文堂: 195-227。
- 奈良市史編集審議会(編), 1986, 『奈良市史－通史編三－』吉川弘文館。
- 幡鎌一弘・安田次郎, 2016, 『祭礼で読み解く歴史と社会－春日若宮おん祭の900年－』山川出版社。
- 東谷智, 2009, 「藤堂藩伊賀国の役割と藩政機構－城和領と広域行政をめぐって－」三重大学歴史研究会(編)『藤堂藩の研究－論考編－』清文堂: 95-122。
- 東谷智, 2014, 「藤堂藩の藩政と伊賀」三重大学歴史都市研究センター(編)『地域社会における「藩」の刻印－津・伊賀上野と藤堂藩－』清文堂: 43-51。
- 樋田清砂, 2001, 「総説『津八幡宮祭礼の成立と展開』」上野市教育委員会(編)『上野天神祭総合調査報告書－三重県指定無形民俗文化財－』: 6-12。
- 深谷克己, 2002, 『津藩』吉川弘文館。
- 福井健二, 1974, 『上野城郭図集』日本古城友の会城郭文庫。
- 福原敏男, 2003, 「津八幡宮祭礼の史料と画像－幕末惣町祭礼の一事例－」『国立歴史民俗博物館研究報告』98: 135-156。
- 福原敏男, 2004, 「祭礼の唐人－朝鮮通信使以前－」まつり・祭・津まつり展実行委員会(編)『まつり・祭・津まつり－ニューヨークから里帰り「津八幡宮祭礼絵巻」－』: 106-114。
- 藤田達生, 2009, 「序章 藤堂高虎と初期藩政史研究」三重大学歴史研究会(編)『藤堂藩の研究－論考編－』清文堂: 3-42。
- まつり・祭・津まつり展実行委員会(編), 2006, 『まつり・祭・津まつり－ニューヨークから里帰り「津八幡宮祭礼絵巻」－』。
- 吉田竜司, 2020, 「『役としての祭り』から『市としての祭り』へ(1)－『役』としての近世山口祇園会－」『龍谷大学社会学部紀要』57: 33-50。

---

## The Feudal World of the Tōdō Domain and the Ueno Tenjin Festival: A Festival for the Domain, a Festival for the Shogunate and a Festival for the People

Ryuji Yoshida

---

The Ueno Tenjin Festival, which developed in the castle town of Iga Ueno, is a typical example of a modern castle town festival that evolved in early modern times. Such festivals, known generically as *hikiyama matsuri* (festivals of decorated floats pulled by hand) became established in the latter Edo period. From the perspective of feudal domain research, this paper examines the kind of social significance these festivals had for ruling feudal clans.

The Tōdō clan, which controlled the castle town of Iga Ueno in feudal times, ruled over a wide area spanning the three domains of Tsu, Iga, and Jōwa, each having a different geopolitical character. The Tsu Hachimangu Shrine Festival, the Ueno Tenjin Festival, and the Kasuga Wakamiya “Onmatsuri” Festival that developed in these three domains were all representative of their respective “small basin universes.” A comparative study of the nature of these festivals in the feudal world of the Tōdō domains reveals that the Tsu Hachimangu Shrine Festival served as a “domain festival” for showcasing and reaffirming the power of the ruling clan; the Kasuga Wakamiya “Onmatsuri” Festival was an “official festival” for the shogunate’s rule of Yamato Province that was obligatory to attend; and the Ueno Tenjin Festival was a “folk festival” that the castle town’s people were free to organize according to their economic power and creativity. It was due to these differences in standing within the feudal world of the time that the Ueno Tenjin Festival later evolved into a *hikiyama matsuri*.